

物語をつむぐ、をライフワークに50年

いまぜきのぶこ
今関信子さん



わたしの
真ん中に
本があったの

作家デビュー50年の節目を迎えた、児童文学作家の今関信子さん（金森町）は、創作活動とともに県児童図書館研究会の会長を長年務めてきました。同会も昨年、発足から50周年の節目を迎え、今関さんは記念誌の発行をもって勇退しました。

今は作家として、同会会員として、「子どもの読書環境を整えたい」「いい本を子どもに届けたい」と、自分なりのテーマで自由に活動が続けています。「日本児童文学」（日本児童文学者協会）の最新刊では、市立図書館をテーマにしたコラムを発表しました。

今回は、子どもたちが読む本と深く関わり続けてきた、今関さんを取材しました。



今関さんが発表した書籍（一部）

はじまりの物語は
本との出会いと思えば

戦時中に東京で生まれた今関さんは、小学校の先生が給食の時間に読んでくれる本が楽しみでした。混沌とした貧しい時代でしたが、いろいろなものを観察しては物語を作って想像するのが

好きでした。幼稚園教諭の時代は、ピアノも絵も苦手だけれど、園児に絵本を読み聞かせてあげるのには得意でした。大好きな仕事でしたが、わが子が普通より少しだけ小さく生まれたことで、お母さんに専念しようと思った。わが子に本を読んであげるの

も、物語を作るのも、書くことも好きだったので、子どもが3歳になった頃から、ジャンルを問わず書いては応募する。投稿マニアになりました。新聞でも雑誌でも児童文学でも何でも作家への道は、この時にはじまりました。児童文学や創作の勉強会、研修会にもどんどん参加するようになりました。

「じっこ遊びが絵本で変身暮らしの中で本の力にふれ

関西で最初に住んだのは京都の新興住宅でした。同じ年代で子育て真っ最中の仲間がたくさんいました。

たくさん読み聞かせをしてきて「本好きで知的に成長するはずだったわが子は、すっかりテレビっ子。友達とヒーローっこに夢中になっていました。口にする言葉も「タア」「トウ」と変身の掛け声ばかり。

今関さんは、わが子と友達を自宅に集めて本の読み聞かせをすることにしました。読み聞かせは得意だったはずなのに、途中で飽きてしまっ子どもたち。ところが、ある日「三匹のやぎの讀んだとき、子どもたちは飽きるところか外遊びに戻ってから、絵本の「じっこ遊び」をしていました。子どもと本の持つ大きな力に感動し、その後の児童図書研究の原点になりました。

あふれる想いをこれからも生活者としての物語を創作

作家活動と児童図書研究会に

共通するのは「いい本を子どもに届けたい」です。県児童図書館研究会に入会した当時、会には、おはなしキャラバン隊や研究会、編集部がありました。研究会の活動はタンポポの綿毛のように会員が暮らしている地域に飛んで芽吹き、単会としての活動をするようになりました。現在の研究会は児童図書を作る編集部が中心になりました。新しくなった市立図書館で毎月1回定例会を開いています。約30人の会員（作家の卵たち）の作品を紹介する「宝箱シリーズ」の発行も続いています。紆余曲折を経ながら同団体が50周年の節目を迎え、今関さん自身も傘寿を迎えて30年以上も務めた同会会長を退きました。しかし、ピリオドを打つつもりはありません。子どもたちの読書環境を整えること、いい本を届けることへの意欲は衰えていません。大好きな「本」を鏝すげに、わが子を育て向き合い、100冊を超える作品を世の中に送り出してきた作家として、初心に戻って活動を続け「自分の代表作となる作品を創りたい」と次作品の調べものや取材、創作に精力を傾けています。

滋賀県児童図書研究会



研究会初期の頃のメンバー（後列右端が今関さん）



現在の研究会例会（市立図書館）

地域の読書活動普及



著者の夜話会



講演会（市立図書館）

作家活動（執筆・調査）



執筆活動



取材資料などを集めて調査